

杜乃杵

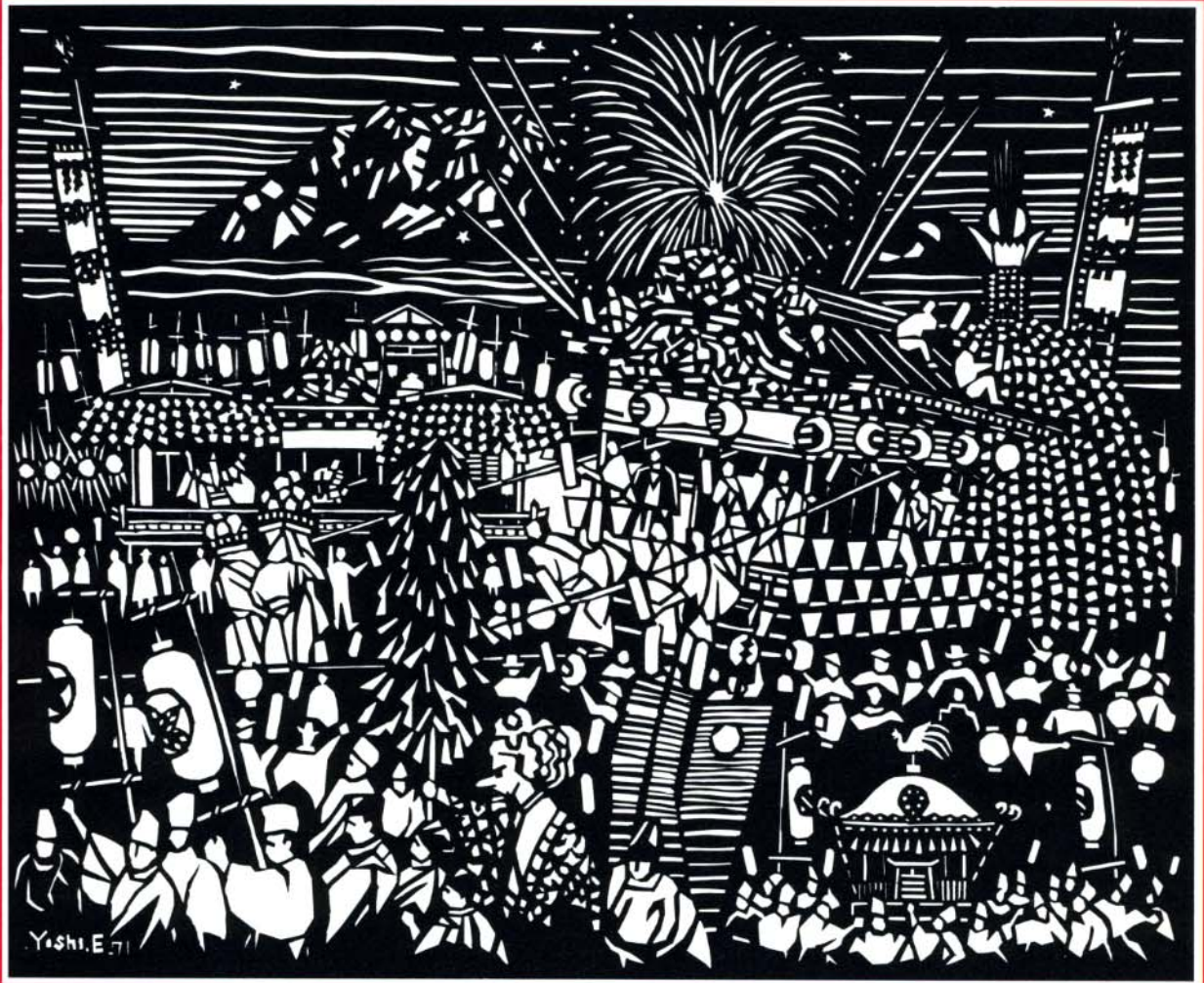
秩父神社社報

杵乃杜（ははそのもり）

第 9 号

平成 5 年 12 月 3 日

（大 祭）



秩父峡
尾根も
まかし
おもひ
祭は
旅の
郷愁と
さそふ

式年の遷宮を言祝ぎて

神風の 吹き寄す國

とこよなみ
常世波 重寄す國

伊勢の地に 鎮まる宮の

あまてらしま
天照坐す 皇大神

この秋の 稔りの秋に
香ぐはしき 新室祝ひ

かむなめ
神嘗の 齋ひの秋に
大神も 若やぎ給ふ

じようあん
淨闇の しじまに響く
しきねん せんぎよ みわざ
式年の 遷御の神業

カケコーの 声さはやかに
おごそかに 果たされ給ふ

たみ
背ぐくまる民の心に 新しき生命の息吹き恵み給へり

二十年という歲月

からりと晴れた 秋の午後
神宮の森に 木漏れ日が射す

ひだり手に古殿 みぎ手に新殿
特設の棧敷に おおぜいの奉拝者

内宮のご遷御は 夜というのに
日の高い内から その時を待つ

端然と坐りつづける 初老の女性
この人に二十年は どう過ぎたのか

ただ夢中に過ぎた この二十年
神に 近づいたか 遠のいたのか

やがて過ぎていく 二十年の歲月
ふたたび この場に参じうるか

かくて 一度だけの人生は終わり
遷宮は また二十年の時を刻む

解説 秩父神社(九)

櫛宜 浅 見 武 史

◆ 国宝短刀「秩父大菩薩」銘

— 謙信景光 —

この度埼玉県で購入いたしました国宝「短刀 銘備州長船住景光」は、現在、宮内庁蔵「御物 秩父大菩薩」と共に、かつて丹党大河原氏によって当社に奉納されたと伝えられる当

■ 国宝短刀(長さ二八・三cm)

銘 表 備州長船住景光

裏 元亨三年三月日

(一二三三年)

■ 御物太刀(長さ六八・六cm)

(反り 二・二cm)

銘 表 願主武蔵国秩父郡大

河原入道沙弥藏連同左衛門尉丹治朝臣時基於播磨国完栗郡三方西造之

裏 作者備前国長船住左

兵衛尉景光進士三郎景政

正中二年七月日

(一二三五年)

社縁深い御品であります。

丹党中村氏の庶流である大河原氏は所領である播磨国完栗郡三方西造之(現、兵庫県完栗郡波賀町)に、備前長船の名工、景光、景政を招き、この二振の刀を造らせ、それぞれの刀身に「秩父大菩薩」の銘を彫らせました。当時、当社は、戦勝の奇瑞を垂れる妙見菩薩の信仰篤き社で、「秩父大菩薩」は当社を意味します。「丹治」は丹党の出自を示す姓であり、「大河原」は丹党の嫡流氏族中村氏の子孫が大河原(現東秩父村)に住んでから称した氏名で、承久の乱

の戦功により播磨国に移り住んだ大河原氏が、遠く本貫の地秩父に心を寄せ、丹党一族の総鎮守、秩父妙見社の社殿造営の奉納物として作刀されたものと思われまます。

この二振の刀が、いつ、どのようにして当社の手を離れたかは今日までのところ明らかではありませんが、戦国時代にはすでに当社を離れていたようです。短刀は、やがて上杉謙信の愛刀となり、別名、「謙信景光」とも言われています。太刀は、明治二十年海軍卿川村純義氏が明治天皇の同家への行幸の際に



裏 元亨三年三月日

表 備州長船住景光

献上され、それ以後御物となった由です。

この度、埼玉県の格別なる御厚慮により地元秩父市に於いて、武蔵武士奉納、「国宝 短刀」の特別公開のため、六百七十年ぶりに神縁深いこの御品が、神前近く奉安、御神慮をお慰め得ました事を無上の喜びと思う次第です。



武蔵武士奉納の国宝「短刀」

埼玉県立博物館蔵

初富士と江戸

宮司 蘭田 稔

日ごろ騒然とした大東京の下町も、年の改まるあとさきは、さすがにしっかりとした江戸の情緒を取り戻すようである。

地方に田舎をもつ者は、家族を連れ友人と連れ立って、ふるさとの正月を祝いに帰り、すでに田舎を離れた者も、思いきって静かな湯治場へ向かうということもある。もともと、近年は若い者どうし賑やかに海外の観光地に出掛けたり、雪山のスキー場で活動的な正月を過ごす者も多い。ともかくも、師走の激戦を無事に乗りきって、せめて正月だけは自分を取り戻そうと思いいに大都會の戦場を離れていく。兵士が戦線を後にすれば、戦場もまたかつての平和な過去がよみがえる。住み慣れて居残る者には、住み慣れてこそその正月の味わいがある。

嘘のように閑静な街並みに門松や注連飾りがチラホラと見えて、着物姿の祝い客たちが日ごろご無沙汰の初詣で——。

おかげで、人々の歩みや流れが普段とは打って変わって、懐かしい横丁の道すじが昔の賑わいを呼び戻す。江戸の下町がどんなに広いといっても、八百八町の道すじにはそれぞれ趣きというものがあって、その由緒を尋ねれば大抵は町内のお宮に辿りつく。

いまは舗装道路に仕切られた境内の一角に、探してみれば道祖神、力石、庚申塔、それに富士塚やら太々神楽講やらの古びた石碑が、享保や文



政などの年号とともに土地の町人たちの名を残して昔のおもかげをとどめている。

近代の震災や戦災ばかりか、江戸開幕の当初から繰り返された埋め立て、移転や大火のおかげで、永遠の未完成都市とさえ言える大都會の東京にも、かの『江戸名所図会』に洩れなく描かれたほどのお宮ならば、たとえビルに囲まれても間違いなく土地の由緒を死守しているはずである。

文化に根ざす日本人の町造りには、かつて日本人なればこそその秩序があった。

そして、その秩序の淵源をたどれば、いうまでもなくふるさとの村や町の景観に重なってくる。村の姿にも農村、山村、漁村とあって実際はたがいに入り混じった性格だが、いまでは何処も都市化が進んで、むかしの特徴はおおかた薄れていよう。

しかし、それでも共通な特色といえば、おかしな話だが、ムラに広場がないということである。西欧をはじめ外国のムラには大抵その中央に広場がある。その広場に教会や役場があって、祭りや公けの集会はそこで行われる。都市もまた然り。いわば地域社会をまとめる神聖な秩序は中央の広場に集中して、周囲に広がる町並みはまた堅牢な城壁が外界から守っている形である。

ところが、日本の村や町には城壁もなければ広場もない。あるのは、ただ一本の往環と横丁の辻、その道筋に張りついた紐状の家並み。すこし離れて横丁の奥に鎮守の森、周りの耕地の先に里山や川岸や海岸が近いというだけで、一見何のまともにもなく日常の集落秩序が少しもはつきりしない。

だが、それでもやはり、ここにも透明な集落秩序があった。普段は隠

れて見えないけれども、年に一度のハレの日に強い印象をもたらす秩序が立ち現われた。

およそ遠近の差はあってもムラからは姿のよい森山や禁足の島があつて、これが、いわば景観秩序の原点である。

この島や山には神が鎮まつていて、祭礼の日に鎮守の里宮に降りて来られ、ムラの往環を横切つて耕地の田宮や海岸の浜宮のお旅所へ行幸される。このとき、普段は生活道路の往環も神聖な広場と化して、祭りの市が立ち、さまざまな芸能が演じられて集落が開放され、住民の心も沸き立って一つになる。

市がマチと呼ばれ、祭がまたマチというように、イチがマツリの場に発生したことは、日本でも海外でも事情はおなじであつた。中世からは市神を迎えて六斎市が盛んとなり、やがて五日市、八日市場、十日町といった地名にさえ残るように、祭りや縁日から町造りが成された例は多い。

江戸の町には、やはり富士山がある。

いまも正月には東京の街からもくつきりと望まれる富士のお山には、江戸時代から町民たちが登拝講を組んだり、氏神の境内に富士塚さえ築いて町内の拠りどころにできた。だが残念なことに、この秘められた秩序感覚を明治の文明開化が押し流して、機能一点張りの都市文明が、かつて江戸八百八町に息づいたコミュニティの息使いを窒息せしめてしまった。

東京の下町にマイ・タウンといった人情を蘇生させるには、この歴史風土に根ざした生活社会の原点から掘り起こさねばならないと、強く感じる今日このごろである。

(昭和五十三年正月 八観神社社報より転載)



【表紙切絵説明】

今回の表紙は、昭和五十一年にお亡くなりになった、秩父市在住の画家、故江原義夫氏の切絵を掲載させていただきました。

同氏は明治四十五年、秩父市柿沼で生糸の原料商を営む江原愛作、キク夫妻の四男として生まれ、その後秩父織物組合に勤務の傍ら創作活動に励まれ、水彩画をはじめとする多くの作品を残されています。故人はたいへんな祭り好きで、多くの作品に祭りを描かれていたことでも、その一端が伺えます。

今回表紙の作品は、秩父市番場町にお住まいの関根巧元氏所有のものを特別にお借しいただき、掲載の運びとなりましたことを申し添えます。

【和歌説明】

秩父峽 尾根もむかしのおもひにて

祭りは旅の 郷愁をさそふ

表紙の和歌は、岐阜県在住の護国神社宮司 森磐根氏の寄稿によるものであります。同氏は現在、岐阜県護国神社宮司、岐阜県神社庁副庁長、更に神社本庁評議員など多くの要職を兼任され、今日ご活躍されています。

また、広く和歌の世界にも精通され、釈超空（折口信夫）氏に師事されて多くの和歌をお詠みになっていらっしゃいます。当社宮司とは、共に日本文化研究所に在籍し、当社欄宜にとりましても恩師にあたる方でいらっしゃいます。

だんじり祭り報告

秩父神社氏子青年会

会員 浜田雄司

昨年の御柱祭りに参加させていただき、あの迫力ある木落としを見た時は、息を飲む思いでした。荒々しさでは、日本一と言われる大阪岸和田のだんじり祭りも、機会があれば是非見てみたいと思っておりましたが、今年の氏青の旅行が「だんじり」と聞き小踊りする思いでした。

九月十三日の夜十時の出発予定でしたが、五分前には全員着席し、参加者の祭りに対する意気込み（期待感）が



伺えました。わずかな仮眠をとり、翌朝八時頃岸和田近くのドライブインへ到着し、中宮地若衆会の数名は秩父夜祭りの姿に、他の人達はフクロウの氏子青年会の半纏姿へと変身し、岸和田へと向かいました。小雨の降る生憎の天気の中、だんじり会館を訪れ、遣り廻しが始まる午前十時半頃、見物にでかけました。

「だんじり」とは地車のことであり、想像していたほど大きなものではなく、大屋根まで三・五メートルくらい、総樫づくりで重さは四トン程度というこ

たり、S字を通り抜けたりする「遣り廻し」と、走るだんじりの大屋根でリズムカルに踊る「大工方」がこの祭りの見所と言われています。だんじり会館近くの通りをだんじりが通過したのでついて行くことにしました。

始めはゆっくりと進み、鳴り物が鳴り、氣勢が上がると、だんじりは勢いよく走りだすといった具合に進み、街の辻々で威勢よく「遣り廻し」を行います。大屋根の上では「大工方」が飛び回り、勢いをつけています。この「遣り廻し」は、見ているだけでも大変面白い行事でした。今年もあまりの勢いに電柱が倒れ、毎年衝突される弁当屋さんもまた、例年通りのこととなつたようです。

名所であるS字カーブでのだんじり通過は、時間の都合で見られませんが、したが、次のメイン会場である駅前では、見物客でごったがえす中、二十台のだんじりが一台ずつセレモニー、そして「遣り廻し」を行い各町内へ戻っていくという一番の見せ場を堪能することができました。

今回この感想としましては、だんじりの勇壮さはもちろんですが、祭りに参加する人達の統率のとれたきびきびした動きが印象的でした。だんじりを中心に、何百人もの人達が小走りに動く様子が、とても綺麗に見えました。一泊三日のハードスケジュールにもかかわらず、とても充実した視察旅行であったと思います。

【註】だんじり祭り

大阪府岸和田市において、毎年九月十四・十五両日にわたり行われる祭礼である。元禄十六年（一七〇三）、時の岸和田城主岡部長泰公が京都伏見稲荷を城内三の丸に勧請し、五穀豊饒を祈願して行われた稲荷祭が始まりと伝えられている。

当時の宮入りでは、城内にだんじりを曳き入れ、二の丸でにわか狂言など各町自慢の芸をお殿様に披露し、その後三の丸稲荷をはじめ、岸和田城の鎮守である神明社と岸城神社へのお参りが行われていた。

今日だんじり祭りは岸城神社・岸和田天神宮・弥栄神社の祭礼として、「宮入り」には三地区に別れて各々の氏神に参拝している。

◆ 氏子青年会活動

七月

川瀬祭助動

夜ばなしの会

八月

武甲山登山

寄居水天宮祭視察

九月

だんじり祭り試写勉強会

だんじり祭り視察

境内清掃奉仕

十月

観月コンサート

川越祭り視察

伊勢神宮式年遷宮報告

我が国の心のよりどころとして崇め祭る、伊勢の神宮におかれましては、本年「第六十一回式年遷宮」が厳肅なうちに斎行されましたことを、ここに謹んでお喜び申し上げます。当社をはじめ神社庁秩父支部、また秩父郡市氏子総代会におきまして、この歴史的行事に協賛すべく種々の活動を行って参りました。ここにその概要を報告させていただきます。

神社本庁をはじめ全国の各神社におきましては、遷宮に際し募財を行いましたところ、当秩父支部におきましては「三千四百二十七万二千円」の浄財を募ることができました。これは当初予定した目標額を約三十三パーセント上回る好成績を納める結果となりました。

また遷宮に先立って行われる「お白石奉献行事」に参加すべく、当地方より

神職および氏子崇敬者からなる奉仕団（百三十五名）を組織し、八月十六日より十九日の日程で参加の運びとなりました。

更に十月二日に斎行されました伊勢神宮内宮の遷宮に際しまして、当社蘭田稔宮司は、特別奉拝者として参列の榮譽に与かりました。また、神社本庁関東ブロックの神職関係者を代表して、当社新井直行権禰宜が遷宮宮掌補に任せられ、十月一日の川原大祓より翌二日の内宮遷宮まで無事ご奉仕することができました。当社にとりまして重ねて名誉なことと嬉しく思い、ここに報告申し上げます。

秩父郡市氏子総代会におきましては、来る三月、遷宮を終えたばかりの伊勢神宮へ「総参宮」を企画致しました。現在参加者を募集しております。参加ご希望の方は本年中に当社社務所までお申し込みください。

今後二十一世紀に向けて我が国が、皇室を中心に弥々の発展を成し、大神様の御神徳のもと、豊かで実りあるくらしが約束されますことを感謝し、世界人民と共に共存共栄の道が開かれますことをこの節目の御年に際し、祈念致したいと存じます。

（写真提供 神宮司庁）



編集後記

■遠く持統帝の御世より、綿々と二十年毎に繰り返されて参りました伊勢神宮式年遷宮が、本年無事に成りましたことを心よりお喜び申し上げます。

■また今回特集致しました秩父大菩薩の御神刀が、本年埼玉県立博物館所蔵となり、当社例大祭に先駆けて、十一月末の五日間にわたり当地において閲覧がなされましたことは、当社にとりまして誠に感慨無量のできごとであつたかと思われまふ。

遠く鎌倉時代、当地を中心として活躍した武士団により、当社に奉納されたと伝えられる秩父大菩薩の御神刀が、この式年遷宮の記念すべき年に、荒川の流れを逆上り、当地に再びもたらされたことは悠久の歴史の流れを鑑みたとともに、誠に意義深い出来事ではなかったかと思われまふ。

■五箇年計画で進めて参りました御大典奉祝事業につきましても、期間半ばにさしかかり、徐々に完成の運びも見えて参りました。今後とも秩父の活性化、また郷土の発展のためにも氏子崇敬者の皆様方には、益々のご理解ご協力をお願い申し上げます。

平成五年（一九九三）十二月三日

編集 秩父神社社務所

発行 秩父神社社務所

〒266 埼玉県秩父市番場町一

TEL (0266) 221-0262

FAX (0266) 241-5596

印刷所 有限会社 拓文社印刷所

〒266 秩父市東町二七一八